

## ペイシストラトスによるホメロス叙事詩の編纂

日向 太郎

### はじめに

キケロ（前106年-43年）の『弁論家について』第3巻には、アテナイの政治家たちの名前が列挙され、彼らが優れた弁論術、文学的哲学的教養を備えていたことが述べられている箇所がある（第34章第137-139節）。いわゆる七賢人が引き合いに出され、紀元前6世紀にアテナイを支配したペイシストラトス（前527年没）については、ホメロス作品の伝承に関して以下のような貢献をなしたことが伝えられている。

Quis doctior eisdem temporibus illis aut cuius eloquentia litteris instructor fuisse traditur quam Pisistrati? Qui primus Homeri libros confusos antea sic disposuisse dicitur, ut nunc habemus. Non fuit ille quidem civibus suis utilis, sed ita eloquentia floruit, ut litteris doctrinaque praestaret.

(Cicero *De oratore* III 137)

その同じ時代、誰がペイシストラトスよりも学識豊かだったと、あるいは誰の弁論がペイシストラトスの弁論よりも文字によって研かれていたと伝えられているだろうか。彼は、それ以前まで混乱していたホメロスの本を最初に現在ある形に整えたと言われている。彼は同朋市民にはたしかに有益な人ではなかったが、弁論において秀でており、文字と学問において傑出することになった。（下線は本論文著者による）

この一節は、ホメロスの叙事詩は、ペイシストラトスによって集成されたことを証言しているが、「それ以前まで混乱していたホメロスの本」という語句が問題である。

そもそも「ホメロスの本（librosは複数形）」という言葉をもって、キケロは何を言おうとしたのか。Mankinは、2つの解釈の可能性を提示している。

- (i) ホメロス作品、すなわち『イリアス』、『オデュッセイア』およびホメロスに帰されていた（現存しない）叙事詩群、いわゆる「叙事詩の環」を構成する個々の作品
- (ii) ホメロス叙事詩の個別の巻

(i) の場合、ペイシストラトスはトロイア戦争という出来事の発端から後日談までを扱った一連の叙事詩群『イリアス *Ilias*』、『オデュッセイア *Odysea*』、そして「叙事詩の環」<sup>1</sup>（すなわち

『キュプリア *Cypria*』、『アイティオピス *Aethiopsis*』、『小イリアス *Parva Ilias*』、『イリオン陥落 *Iliu persis*』、『婦国物語 *Nosti*』、『テレゴニア *Telegonia*』) を時系列に従って正しく並べたことになる。

一方 (ii) の場合、Homerus = Homeri poesis (ホメロス叙事詩) という意味で解することになり、元来は個別の語り物として演じられたエピソードを含む「巻」を単位として、それぞれの叙事詩が組み立てられたことになる。

Mankin はこのように説明し、近年の解釈は大方 (ii) の意味で解するとまとめている<sup>2</sup>。『イリアス』、『オデュッセイア』、『キュプリア』などと作品が個々に独立しており、それぞれの作品に対応した内容的枠組み、叙述範囲が確定していれば、一連の叙事詩群を出来事の時系列を即して並べることは容易である。そもそも「混乱」することもなさそうであり、集成の労も要さないように思われる。したがって、(i) の可能性はありそうもない。

しかし、(ii) の意味で取るとしても、曖昧さは残る。「巻」というのは、作品の小部分ということだろうと思われるが、それが文字化された実体、すなわち(素材がパピルスであれ、羊皮紙であれ) 文書を意味するのか (a)。この場合、ペイシストラトスによる集成以前にも、たしかにホメロスの詩は文字によって伝えられてはいたが、現在あるような全体的なまとまりはなかったことになる。それとも、ある内容的まとまりを持っているが文字には写されていない口誦物語を意味するのか (b)。またもし (b) であるとすれば、ペイシストラトスは文字化されていない口誦物語を文字化したのか (b1)。それとも、個別の口誦物語の順序を定めただけなのか (b2)。

とはいえ、「litteris instructor 文字によって (より一層) 研かれた」という語句を考慮すれば、(a) の意味で取るべきだろう。「文字によって litteris」というからには、ギリシア文化の実際がどうあれ、やはり著者キケロは文字文化における学識や教養を念頭に置いていると見るのが自然である。ただし、それは絶対的に (b) の可能性を排除する程ではないようにも思われる。そのことは、本論の後続の記述からも察せられるだろう。

そもそも、キケロの一節は、何に基づいているのだろうか。我々の知る限り、ペイシストラトスによるホメロス叙事詩の集成に関わる証言としては、この一節が最古である。しかし、キケロがこの話を自己都合で捏造したのでない限り、何か典拠があるはずである。Wisse、Winterbottom、Fantham は、共著で刊行した注釈書で、「ペイシストラトス集成説」がヘロドトス、トゥキュディデスの歴史書、さらに(前3-2世紀にホメロス叙事詩の校訂を行った)アレクサンドレイア学派の記述にも認められないこと自体、史実ではないことを示唆しているとみなし、(アレクサンドレイア図書館における校訂を完結させた)アリストアルコス後に生まれた伝説だと考えている<sup>3</sup>。そして(小アジアの)ペルガモンと結びつきの強いミュルレアのアスクレピアデスを典拠の候補として挙げる<sup>4</sup>。一方、Mankin は、アスクレピアデスに加えて、アリスト

<sup>1</sup> 叙事詩の環 (Cyclus) は、現存しない叙事詩作品群である。しかし、それらの題名とあらすじは知られており、わずかな断片が残っている。『キュプリア』は時系列的に『イリアス』に先行する出来事を扱い、『アイティオピス』、『小イリアス』、『イリオン陥落』、『婦国物語』は『イリアス』と『オデュッセイア』のあいだの出来事を扱う。『テレゴニア』は、『オデュッセイア』のあとのできごとである。後5世紀のプロクロスが書いた『梗概』(Chrestomathia) を、9世紀のポティオスがさらに抜粋したものが残っている。

<sup>2</sup> D. Mankin, *Cicero De oratore Book III*, Cambridge 2011, 223-224.

テレスの弟子メッサナのディカイアルコスも候補としている<sup>5</sup>。そうだとすれば、「集成説」の典拠は前4世紀後半から前3世紀のはじめにまで遡ることになるだろう。

『弁論家について』の上記一節（本論においてはキケロ証言と称することにする）は、Wisse、Winterbottom、Fanthamの言うように、史実ではないのかも知れない。しかし、その記述は上で見たように曖昧な表現を含むものであり、多様な解釈を許す余地があるように思われる。本稿は、ホメロス叙事詩の伝承のありかたに新しい視座を提案するようなものではない。むしろ、他の類似する証言と比較しながら、キケロ証言をそれらと関連付けた上で、この証言の発生した経緯を蓋然的に説明することを目的とする。

### (1) 『パラティン詞華集』第11巻第442歌

ホメロス詩の伝承に、ペイシストラトスが関わったことを伝える他の証言としては、『パラティン詞華集』第11巻に収められた以下のエピグラム詩（成立年代不詳）を挙げるができる。

Τρίς με τυραννήσαντα τοσαυτάκις ἐξεδίωξεν  
 δήμος Ἐρεχθίδος, καὶ τρίς ἐπηγάγετο,  
 τὸν μέγαν ἐν βουλῇ Πεισίστρατον, ὃς τὸν Ὀμηρον  
 ἤθροισα, σποράδην τὸ πρὶν ἀειδόμενον  
 ἡμέτερος γὰρ κείνος ὁ χρύσεος ἦν πολίτης,  
 εἴπερ Ἀθηναῖοι Σμύρναν ἀπώκισαμεν.

(*Anthologia Palatina* 11.442)

私は三度僭主になったが、それと同じ数だけエレクトエウスの国（＝アテナイ）は私を追放し、私を三度呼び戻した<sup>6</sup>。民会において偉大なるこの私ペイシストラトスは、それ以前に断片的に歌われていたホメロス作品を集めた。それというのも、もし我々アテナイ人がスミュルナ<sup>7</sup>を植民地としたならば、かの黄金の人物（＝ホメロス）は我々の市民であるから。

<sup>3</sup> J. Wisse, M. Winterbottom, E. Fantham, *M. Tullius Cicero. De Oratore Libri III. A Commentary on Book III*, 96-230, volume 5, Heidelberg 2008, 145; S.R. Slings, "Literature in Athens, 566-510 BC" in Heleen Sancisi-Weerdenburg (ed.), *Peisistratos and the Tyranny: a Reappraisal of the Evidence*, Amsterdam 2000, 57-77, 75-76; R. Janko, *The Iliad: a commentary. Volume IV: books 13-16*, Cambridge 1994, 32.

<sup>4</sup> ミュルレアのアスクレピアデスについては、M.S. Jensen, *The Homeric Question and the Oral-Formulaic Theory*, Copenhagen 1980, 131-132.

<sup>5</sup> Mankin, 223.

<sup>6</sup> D.L. Page (ed.) (*Further Greek Epigrams*, Cambridge UP. 1981, 338-339) が言うように、実際には、追放されたのは二度であるが<sup>8</sup>、τρίς（三度）の単語の繰り返しを優先した修辭的な詩句になっている。

<sup>7</sup> スミュルナは、キオス、コロポンなどと共にホメロスの生誕地と言いつたされている。Cfr. T.W. Allen (ed.) *Homeri Opera*, tomus V, Oxford 1912, 245.

ホメロス写本に含まれる詩人の伝記によれば、この詩行はアテナイにあったペイシストラトスの彫像に添えられた碑銘である<sup>8</sup>。しかし、Page はそのような碑文が紀元前5世紀前半のペルシア戦争後に破壊されずに残ったとは考えられないから、この証言は疑わしいとする<sup>9</sup>。ペイシストラトスの末裔はアテナイを追放された後、ペルシアの軍事力を後ろ盾にして、返り咲きを謀ったから、Page の言うことも頷ける。

いずれにせよ、「私」とはペイシストラトスのことで、これは彼の彫像が自己について語っているという趣向の詩行である。「それ以前に断片的に歌われていたホメロス作品を集めた」という一節は、キケロ証言（「それ以前まで混乱していたホメロスの本を最初に現在ある形に整えた」）と関連する。もっとも、「断片的に歌われていた」という表現は、比較的小規模の歌が分離独立していたことを思わせるので、「混乱していた」と意味は異なるだろう。また、ここでは「歌われていた ἀειδόμενον」という語から、ペイシストラトスが関与する以前ホメロス作品はもっぱら口誦詩だったことを意味していると見るのが妥当だろう。上の分類でいえば (b) である。ただし、「集めた ἥθροισα」は文字化して集成したのか (b1)、それとも散在していた口誦詩 (人) を集めて、口頭的に編集した、つまり口演の順序を定めたのか (b2) は、判別し難い。

このエピグラムの成立年代については、残念ながら不明である。したがって、これがキケロ証言の典拠になったかどうか判断はつかない。

## (2) パウサニアス『ギリシア案内記』第7巻第26章第13節

紀元後2世紀のパウサニアスの『ギリシア案内記』第7巻には、ペイシストラトスのホメロス詩集成とともに、改変について証言している興味深い箇所がある。

Αἰγείρας δὲ ἐν τῷ μεταξὺ καὶ Πελλήνης πόλισμα ὑπήκοον Σικυωνίων Δονοῦσσα καλουμένη ἐγένετο μὲν ὑπὸ τῶν Σικυωνίων ἀνάστατος, μνημονεύειν δὲ καὶ Ὅμηρον ἐν καταλόγῳ τῶν σὺν Ἀγαμέμνονι φασιν αὐτῆς ποιήσαντα ἔπος

“οἳ θ’ Ὑπερησίην τε καὶ αἰπεινὴν Δονόεσσαν” (Hom. II. 2.573)

Πεισίστρατον δέ, ἤνικα ἔπη τὰ Ὀμήρου διεσπασμένα τε καὶ ἄλλα ἀλλαγοῦ μνημονευόμενα ἤθροϊζε, τότε αὐτὸν Πεισίστρατον ἢ τῶν τινα ἐταίρων μεταποιῆσαι τὸ ὄνομα ὑπὸ ἀγνοίας.

(Pausanias 7.26.13)

アイゲイラとペツレネのあいだに、シキュオン人に帰属しドヌッサ (=ドノエッサ) という名の市があったが、シキュオン人に滅ぼされた。人々が言うには、ホメロスもアガ멤ノンの率いる軍勢の一覧において、この市について歌った。

「彼ら (= ミュケナイ人は) ヒュペレシアと険しいドノエッサ (を所有し)」

(ホメロス『イリアス』第2巻573行)

ペイシストラトスはホメロスの詩が散らばっていて、別々の場所で別様に歌われていたのを集め、そのときペイシストラトス自身もしくは彼の友人の誰かが、無知故にその名前を

<sup>8</sup> Allen, 248-249.

<sup>9</sup> Page, 339.

〔ドノエッサからゴノエッサに〕改変したと言われている。

パウサニアスは、本来の Δονόεσσαν が現在伝えられている Γονόεσσαν に改変されたことを、ペイシストラトスもしくは彼の友人に帰している。ここでも、「散らばっていて、別々の場所で別様に歌われていたのを集め」という編集作業を示唆するような表現があり、(1)のエピグラム中の「断片的に歌われていた」に相当するように思われる。また、「歌われていた」は、やはり編集作業前にはもっぱら口誦に頼り、詩歌が文字化されていない状態を意味するはずである。一方で、口誦を職業としないペイシストラトスもしくはその友人が地名を改変したということは、彼らがドノエッサという地名に馴染みがなく、Δの文字を当てるべきところをΓの文字を当てたと考えるのが妥当だろう。つまりこの一節では、ペイシストラトスが、口頭で演じられていた叙事詩を文字に写して集成していることが想定されている。冒頭の種類で言えば、(b1)である。

なお、この改変を証言する作家はパウサニアス以外知られておらず、その典拠についても不明である<sup>10</sup>。

### (3) アイリアノス『ギリシア奇談集』第13巻第14章

パウサニアスよりも少し後の世代に属すアイリアノスも、『ギリシア奇談集』において、ペイシストラトスのホメロス編纂事業について触れている。

ὅτι τὰ Ὀμήρου ἐπι πρότερον διηρημένα ἤδον οἱ παλαιοί. οἶον ἔλεγον τὴν ἐπὶ ναυσὶ μάχην καὶ Δολώνειαν τινα καὶ Ἀριστείαν Ἀγαμέμνονος καὶ Νεῶν κατάλογον καὶ Πατρόκλειαν καὶ Λύτρα καὶ Ἐπὶ Πατρόκλῳ ἄθλα καὶ Ὀρκίων ἀφάνισιν. ταῦτα ὑπὲρ τῆς Ἰλιάδος. ὑπὲρ δὲ τῆς ἐτέρας τὰ ἐν Πύλῳ καὶ τὰ ἐν Λακεδαίμονι καὶ Καλυψοῦς ἄντρον καὶ τὰ περὶ τὴν σχεδίαν καὶ Ἀλκίνου ἀπολόγους καὶ Κυκλώπειαν καὶ Νέκυιαν καὶ τὰ τῆς Κίρκης καὶ Νίπτρα καὶ Μνηστήρων φόνον καὶ τὰ ἐν ἀργῷ καὶ τὰ ἐν Λαέρτου. ὁπὲρ δὲ Λυκοῦργος ὁ Λακεδαιμόνιος ἀθρόαν πρῶτος ἐς τὴν Ἑλλάδα ἐκόμισε τὴν Ὀμήρου ποίησιν· τὸ δὲ ἀγώγιμον τοῦτο ἐξ Ἰωνίας, ἠνίκα ἀπεδήμησεν, ἤγαγεν. ὕστερον δὲ Πεισίστρατος συναγαγὼν ἀπέφηνε τὴν Ἰλιάδα καὶ Ὀδύσσειαν.

(Aelianus *Varia Historia* 13.14)

ホメロスの叙事詩を、古代人はかつて断片的に歌っていた。たとえば「船陣脇のたたかい」、「ドローン譚」、「アガメムソンの武勇伝」、「軍船表」、「パトロクロス譚」、「贖い」、「パトロクロスのための奉納競技」、「誓約破綻」といった具合に呼んでいた。以上は『イリアス』に関するものである。他方の作品 (= 『オデュッセイア』) に関するものは、以下の通り。すなわち、「ピュロスにおけるできごと」、「ラケダイモンにおけるできごと」、「カリユプソの洞窟」、「筏に乗る話」、「アルキノオスの物語」、「キュクロプス譚」、「招魂」、「キルケの物語」、「足洗い」、「求婚者殺戮」、「田園のできごと」、「ラエルテスの家のできごと」

<sup>10</sup>ペイシストラトスではなく、ソロンが『イリアス』第2巻558行を挿入し、本文を改竄したという伝承については、Strabo 9.1.10 (394), Diogenes Laertius 1.48, Plutarchus *Solo* 10.2, Quintilianus 5.11.40 などの証言がある。しかし、本稿ではこの問題には深く立ち入らないことにする。

である。後になって、ラケダイモン（＝スパルタ）のリュクルゴスが初めてホメロスの詩を一括してギリシアにもたらした。本国を離れた折に、イオニア（＝小アジア半島南西部沿岸とその付近の島嶼部）からこの積み荷を運んだのである。さらにその後、ペイシストラトスが集成して、『イリアス』と『オデュッセイア』とを公けにしたのである。

ここでも、ホメロス作品が伝統的には口誦叙事詩だったことが含意されており、またそれが一つのまとまった作品としてではなく、断片的に分割された状態で口演されていたことが窺える。この点は、すでに見た *AP.* 11.442 や *Pausanias* 7.26.13 の記述と共通する。さらに断片的な歌が、具体的にどのような題材を扱って、それぞれどんな呼称を有していたかが例示されている点が目を惹く。たとえば『イリアス』に含まれる歌で言えば、「船陣脇のたたかい」、「ドローン譚」、「アガメムノンの武勇伝」、「パトロクロス物語」は、それぞれ現在の第 13 巻、第 10 巻、第 11 巻、第 16 巻に相当し、「軍船表」は第 2 巻の後半部分に相当する。こうした呼称は、古註（スコリア）や（12 世紀後半テッサロニカの大主教だった）エウスタティオスが著した註釈のなかで言い慣わされたものでもある。また、プラトンの『イオン』のなかで、ソクラテスが口誦詩人イオンを相手に、『イリアス』第 12 巻の一節を引用するときには、「『イリアス』における防壁をめぐる戦い」という語句を用いて箇所を特定する<sup>11</sup>。

アイリアノスは、現状の巻分けがかつての断片に相当していることを示唆している。この点で、キケロ証言とも合致している。また、「後になって、ラケダイモンのリュクルゴスが初めてホメロスの詩を一括してギリシアにもたらした」という叙述は、それぞれの断片がすでに文字化された状態で、おそらくは小アジア西岸もしくはその付近の島に存在していたことを意味する。「この積み荷を運んだ」とあるから、詩は文書として持ち運び可能な状態になっていたはずである<sup>12</sup>。この場合、ペイシストラトスの編纂事業は、個々の文字化済みの断片的物語を時系列に沿って並べ替え、つなぎ合わせたことになるだろう。したがって冒頭の分類で言えば、(a) ということになる。

そもそも、『イリアス』にせよ『オデュッセイア』にせよ、特別な機会でもない限りは（これについては (5) で述べる）全体が通して歌われることはなく、通常はアイリアノスが列挙しているような断片的物語が個別に口演されていたのではないかと推測される。実際、『オデュッセイア』の宴の場面に登場する口誦詩人は、アカイア勢の帰国談、オデュッセウスとアキレウスの諍いの物語、夫へパイストスが妻アプロディテと間男アレスの不貞の現場を取り押える話、オデュッセウスが木馬の計によってトロイアを陥落させる物語など特定のくだりを余興として選んで聞かせる。それは、長大な物語群のひとつくさりであり、長編講談の抜き読み、たとえば『太閤記』のなかの「高松城の水攻め」の一席などに相当するのだろう。

アイリアノスは、ローマ人だったからキケロの『弁論家について』を読んでいた可能性は大いにある。冒頭に掲げた *De oratore* 3. 137 を踏まえ、各断片の呼称を具体的に挙げて記述を膨らま

<sup>11</sup> *Plato Ion* 539 b1: “πολλαχοῦ δὲ καὶ ἐν Ἰλιάδι, οἶον καὶ ἐπὶ τειχομαχίᾳ.”

<sup>12</sup> ἀγώγιμος は「運搬可能な」という意味で用いられる形容詞であり、アイリアノスは文書になった状態を想定している。

せただけかもしれない。しかし、それでもリュクルゴスへの言及（「リュクルゴスが初めてホメロスの詩を一括してギリシアにもたらした」）は、これまで見て来たキケロ証言、(1)、(2)には見当たらない。次はこの言及について検討する必要がある。

#### (4) プルタルコス『リュクルゴス伝』第4章第4-6節

ἀπὸ δὲ τῆς Κρήτης ὁ Λυκοῦργος ἐπὶ Ἀσίαν ἐπλευσε, βουλόμενος, ὡς λέγεται, ταῖς Κρητικαῖς διαίταις, εὐτελέσιν οὔσαις καὶ αὐστηραῖς, τὰς Ἴωνικὰς πολυτελείας καὶ τρυφάς, ὥσπερ ἰατρὸς σώμασιν ὑγιεινοῖς ὑπουλα καὶ νοσοῦν, παραβαλὼν ἀποθεωρῆσαι τὴν διαφορὰν τῶν βίων καὶ τῶν πολιτειῶν, ἐκεῖ δὲ καὶ τοῖς Ὀμήρου ποιήμασιν ἐντυχὼν πρῶτον, ὡς εἶοικε, παρὰ τοῖς ἐκγόνοις τοῖς Κρεοφύλου διατηρουμένοις, καὶ κατιδὼν ἐν αὐτοῖς τῆς πρὸς ἡδονὴν καὶ ἀκρασίαν διατριβῆς τὸ πολιτικὸν καὶ παιδευτικὸν οὐκ ἐλάττονος ἄξιον σπουδῆς ἀναμειγμένον, ἐγράψατο προθύμως καὶ συνήγαγεν ὡς δεῦρο κομιῶν. ἦν γάρ τις ἤδη δόξα τῶν ἐπῶν ἀμαυρὰ παρὰ τοῖς Ἕλλησιν, ἐκέκτηντο δὲ οὐ πολλοὶ μέρη τινά, σποράδην τῆς ποιήσεως, ὡς ἔτυχε, διαφορομένης γνωρίμην δὲ αὐτὴν καὶ μάλιστα πρῶτος ἐποίησε Λυκοῦργος.

(Plutarchus *Lycurgus* 4.4-6)

リュクルゴスは、クレタ島からアジアに向かって渡航した。人々の言うところでは、ちょうど医師が健康である肉体と潜在的に病んでいる、あるいははっきり病んでいる肉体とを比較するように、質素で厳格であるクレタの慣習にイオニアの贅沢と奢侈を対照させ、生活様式と市民社会についての違いを観察しようと望んだ。イオニアの地では、まず初めにホメロスの詩に出会った。それは恐らく、クレオピュロスの末裔のあいだで保存されていたものである。この詩のなかに、快楽や放縦に奉げられる余暇に劣らず、研究に価する教育的かつ市民制度的なものが混ざっているのを見出したので、そこから持ち出せるように熱心に筆写させ、まとめたのである。というのも、ギリシア人たちのあいだでは、すでにこの詩についての名声は著しかったが、それ相応の部分の保存している者は多くはなかったからである。偶然そうになってしまっていたことだが、詩はバラバラの状態で散在していた。この詩を、なかなしく初めて、人々に知らしめたのは、リュクルゴスだった。

リュクルゴスは、スパルタの伝説的な支配者、立法者であり、そもそも生存時代も不確かである。前4世紀の歴史作家エポロス Ephorus は、ホメロスとリュクルゴスは直接会ったと述べている<sup>13</sup>。しかしこの人物の伝説的性格にもかかわらず、Manfredini と Piccirilli によれば、イオニアからホメロス詩が（アテナイではなく）スパルタに初めて伝えられたという説自体には、信憑性がある。というのも、その地においてはかなり早い段階からホメロス叙事詩が知られていたことが証拠づけられるからである。具体的には、紀元前7世紀半ばのスパルタの詩人、テュルタイオス Tyrtaeus やアルクマン Alcman の断片には、ホメロス叙事詩の模倣もしくは影響が認められ

<sup>13</sup>Cf. F. Jacoby, *Die Fragmente der griechischen Historiker*, Berlin 1926, F 70 149.19; Janko, 30.

<sup>14</sup>M. Manfredini e Luigi Piccirilli, *Plutarco Le vite di Licurgo e di Numa*, Milano 1980, 227.

る<sup>14</sup>。

「クレオピュロスの末裔」（上記引用下線部箇所参照）についても伝説がある。ストラボンによれば、彼はホメロスをもてなしたということで『オイカリア陥落』なる叙事詩を与えられたと言われている<sup>15</sup>。Jankoによれば、彼らはサモス島にあって、キオス島のホメリダイ（ホメロスの末裔）と並ぶラプソドスたちのギルドを形成していたらしい<sup>16</sup>。

プルタルコスも、クレオピュロスの末裔がホメロスの作品を文字化された状態で（おそらくは独占的に）保存していたことを想定している。リュクルゴスなる人物が誰であれ、スパルタから国家の指導者が、海外視察に出かけ、そこで（分割されていたとはいえ）まとまったホメロス叙事詩を発見した。作品の備えている教育上の有用性に着眼し、自国民の啓蒙手段として、これを筆写、集成したことになるだろう。リュクルゴスがクレオピュロスの末裔からホメロスの詩を入手し、最初にペロポネソス半島に伝播させたという説は、紀元前2世紀のヘラクレイデス・レンボス Heraclides Lembus の『国制論抜粋 *Excerpta Politiarum*』も伝えている。これはアリストテレスの（『アテナイ人の国制』を除き失われた）『国制論』の抜粋である。したがって、プルタルコスの上記一節の源泉も、アリストテレスの生存した前4世紀にまで遡る可能性がある<sup>17</sup>。

#### (5) 伝プラトン『ヒッパルコス』228 b4-c1

プルタルコスの記述は、為政者が同朋市民の教化のためにホメロス詩を利用しようとしたことを証言するものであるが、同じような目的に即したホメロス作品のポリス社会への導入や制度化は、アテナイにも認められる。なかでも、ペイシストラトスの息子、ヒッパルコス（前514年没）の文化事業は名高い。プラトンの対話篇『ヒッパルコス』のなかには、哲学問答から逸脱した、(ソクラテスによる)ヒッパルコス礼賛ともいべき一節が含まれている<sup>18</sup>。

πολιτή μὲν ἐμῶ τε καὶ σῶ, Πεισιστράτου δὲ ὑεὶ τοῦ ἐκ Φιλαϊδῶν, Ἰππάρχῳ, ὃς τῶν Πεισιστράτου παίδων ἦν πρεσβύτατος καὶ σοφώτατος, ὃς ἄλλα τε πολλὰ καὶ καλὰ ἔργα σοφίας ἀπεδείξατο, καὶ τὰ Ὀμήρου ἔπη πρῶτος ἐκόμισεν εἰς τὴν γῆν ταυτηνί, καὶ ἠνάγκασε τοὺς ῥαψωδοὺς Παναθηναίους ἐξ

<sup>15</sup>Strabo 14.1.18 (638): “Σάμιος δ’ ἦν καὶ Κρεώφουλος, ὃν φασι δεξάμενον ξενία ποτὲ Ὀμηρον λαβεῖν δῶρον τὴν ἐπιγραφὴν τοῦ ποιήματος ὃ καλοῦσιν Οἰχαλίας ἄλωσιν”.

<sup>16</sup>Janko, 31.

<sup>17</sup>M.R. Dilts, *Heraclides Lembi Excerpta Politiarum*, Durham NC 1971, 10: “Λυκογργος ἦν Σμικρογνετο. καὶ τὸν μικροῦ ποίησιν παρτὸν πογνῶν Κρεοφλου λαβὸν πρὸτος διεκμίσηεν εἰς Πελοπόννησον”. Cfr. Manfredini e Piccirilli, 227; Janko, 30.

<sup>18</sup>この他、『ヒッパルコス』成立とはほぼ同時代である弁論家リュクルゴスもまた、『レオクラテス反駁』（*Oratio in Leocratem* 102-104）において、パナテナイア祭におけるホメロス叙事詩口演の導入に触れ、口演が市民倫理の形成に貢献したことを述べている。もっとも、ヒッパルコスの名前は挙げず、誰が口演を始めたのかについては特定していない。ディオゲネス・ラエルティオス Diogenes Laertius は、口演の規則を定めたのはソロンだと考えている（Diogenes Laertius 1.57）。ディオゲネスによれば、ディオエウキダスは『メガラ史』第5巻において、ペイシストラトス—比較の対象はヒッパルコスではなく—よりもソロンの方が、ホメロス叙事詩を明らかにしていると述べている。このディオゲネスの一節については、稿を改めて論じたい。



ὕπολήψεως ἐφεξῆς αὐτὰ διέναι, ὡσπερ νῦν ἔτι οἶδε ποιούσιν, (...)

([Plato] *Hipparchus* 228 b4-c1)

私とあなたの同朋市民、ピライデス区の人ペイシストラトスの息子、ヒッパルコス、ペイシストラトスの息子たちのなかで最年長で最も賢明であり、知にかかわる他の多くの良き功績を示したが、とりわけホメロスの叙事詩を最初にこの土地にもたらした。そして、パナテナイア祭においてラブソドイ（朗誦家たち）がこの詩を、今日もなお彼らがそうしているように、順々に担当を受け持って叙事詩を歌い通すようにさせたのである。

今日『ヒッパルコス』はプラトンの真筆とは認められていないが、その成立年代は、ほぼ彼と同時代の紀元前4世紀前半と考えられている<sup>19</sup>。一方、パナテナイア祭においてラブソドイがホメロス叙事詩の口演を行うようになったのは、紀元前522年と推定されている<sup>20</sup>。したがって祝祭における叙事詩口演の創始と証言との年代的開きは、150-170年程度だと想定される。

ヒッパルコスは、文芸のパトロンとして、この他にもテオス島に50の櫂を備えた船を送ってアナクレオン Anacreon をアテナイ市に招聘し、ケオス島のシモニデス Simonides が常に自分の許にるように莫大な給金と贈り物を与えた (*Hipparchus* 228 c1-3)。

ヒッパルコスによって、アテナイの市民たちは、ホメロスの『イリアス』、『オデュッセイア』の全篇を、パナテナイア祭においてはじめて通しで聞くことができるようになったのだろう。「順々に担当を受け持って叙事詩を歌い通す」とは、口頭的に各巻の順序を整え編集したことを意味するのだろう。それは、キケロ証言で言われていた「それ以前まで混乱していたホメロスの本を最初に現在ある形に整えた」を、口演の次いで実践したことになるのではないか。冒頭の分類で言えば (b2) である。

ただし、通しの口演に際して叙事詩の筆写が行われたのかどうかまでは分からない。そもそも「ホメロスの叙事詩を最初にこの土地にもたらした (τὰ Ὀμήρου ἔπη πρώτος ἐκόμισεν εἰς τὴν γῆν ταυτηνί)」と言うとき、それは文書を持ち込んだのだろうか。それとも、口誦詩人を呼び招いたと考えるべきだろうか。たしかに、この表現は、アイリアノスがリユクルゴスについて述べている「初めてホメロスの詩を一括してギリシアにもたらした (ἐς τὴν Ἑλλάδα ἐκόμισε τὴν Ὀμήρου ποιήσιν)」とよく似ている。両者に共通して用いられている *κομίζω* という動詞は、プルタルコスの一節「そこから持ち出せるように ὡς δεῦρο κομιῶν」にも認められる。アイリアノスやプルタルコスの文脈では、*κομίζω* は文書を目的語としてしている。しかし、だからといって『ヒッパルコス』の *ἐκόμισεν* も、同様だと断定するのは早計だろう。この動詞は、巻物や書板のような物体のみならず、「説 *δόξα*」、「哲学 *φιλοσοφία*」のような概念や学問をも目的語とすることがあるからである<sup>21</sup>。また、詩人アナクレオンやシモニデスを招いたという後続の一節との兼ね合い

<sup>19</sup>J. Souilhé (ed.), *Platon œuvres complètes*, tome XIII 2<sup>e</sup> partie, Paris 1962<sup>2</sup> (1930<sup>1</sup>), 58 は、作者がヒッパルコスをペイシストラトスの長男としているが、これは作者がトゥキュディデス Thucydides 『戦史』を知らなかったからだと考える。なお、トゥキュディデスが没したのは前400年頃だが、ディオゲネス・ラエルティオスにおいては、トゥキュディデスの著作は著者の存命中には発表されず、死後クセノポン Xenophon の手によって公刊されたと伝えられている (Diogenes Laertius 2.57)。

<sup>20</sup>M.L. West, *Studies in the Text and Transmission of the Iliad*, München und Leipzig 2001, 17-18.

から、ヒッパルコスが口誦詩人を集めたことをもって「ホメロスの叙事詩を最初にこの土地にもたらした」と言っていると解することも不可能ではない。さらに、アテナイにもたらしたものが文書だったとしても、(4) のリュクルゴスとは異なり、彼がどこからそれを入手したのかは記されていない。

叙事詩の入手先が特定されていない点では、キケロ証言も、そして (1) も (2) も同様である。ペイシストラトスがホメロス詩の書写された文書をどこから得たのか、あるいはどこでホメロス詩を通して聴くことができたのかについては触れていない。スミュルナはホメロスの生誕地と見なされていても、歌の採録地として示唆されているのではない。(2) によれば、散り散りになっていたホメロスの叙事詩は、「別々の場所で別様に歌われていた」状態だった。これは単に口誦叙事詩人が、ギリシアの各地で活動していたことを述べているに過ぎない。

結局ペイシストラトスの集成説を伝える証言のうち、入手先を特定しているのは (3) のみということになる。もっとも (3) は、(4) の述べているようなリュクルゴスによる叙事詩入手を前提としている。おそらくはペイシストラトスがどこからまとまった写本を得たのかを合理的に説明しようとした結果である。

## まとめ

ペイシストラトスによるホメロス叙事詩の集成を証言するキケロの一節は、集成前の叙事詩の状態を「混乱した *confusos*」と伝えている。これに対し、(1) *AP* 11.442、(2) *Pausanias* 7.26.13、(3) *Aelianus Varia Historia* 13.14 においては、集成前の作品の状態を「混乱」ではなく、断片的であると性格づけている。とりわけ (3) は、どのように作品が分割されていたかについて具体的に証言している。またペイシストラトスによる集成前から文字化されていたか否かについては (1) も (2) も明らかにはしていない。集成後文字化されたか否かについては、(1) は明言せず、(2) は文字化を示唆しているように思われる。(3) は文字化されたものの導入をリュクルゴスに帰し、これがペイシストラトスの編纂事業の基礎になったと考えている。

もっとも、ホメロス叙事詩の集成はペイシストラトスのみに帰されたわけではない。(4) *Plutarchus Lycurgus* 4.4-6 は、これをもつばら、伝説的なスパルタの指導者リュクルゴスの功績として紹介している。(4) の記述が、現在では失われたアリストテレス『国制論』のスパルタにかんする記述に基づいていたことは確実である。リュクルゴス集成説の方が、ペイシストラトス集成説よりも古い時代に成立したと思われる。そして (4) もまた、(1)～(3) と同様、集成前の作品の状態を断片的だったとしている。

アリストテレスとほぼ同時代に成立したとみなし得る (5) *Hipparchus* は、ペイシストラトスの息子が、パナテナイア祭におけるホメロス叙事詩の通し口演を確立したことを証言する。これは、『イリアス』や『オデュッセイア』の口頭的な編集を意味する。一方で、冒頭に述べたよう

<sup>21</sup>H.G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, Oxford 1968 (18431), 975, s.v. κομίζω II 5. 用例としては、*Isocrates* 11.28 (μαθητῆς ἐκείνων γενόμενος τὴν τ' ἄλλην φιλοσοφίαν πρῶτος εἰς τοὺς Ἕλληνας ἐκόμισε) および *Aristoteles, Ethica Nicomachea* 1096a 17 (οἱ δὴ κομίσαντες τὴν δόξαν ταύτην οὐκ ἐποίουν ἰδέας) が挙げられている。

に、キケロ説もまた口頭的な編集について述べていると解することも可能である。キケロの述べたペイストラトスの集成説は、ヒッパルコスが創始したホメロス叙事詩の通し口演に、紀元前4世紀には存在していたリュクルゴス集成伝説が融合した結果出来上がった伝説に基づいているのだろう。

以上から、ホメロス叙事詩の伝承についても仮説を述べておく。伝承形態はギリシア全域において一様だったとは思われず、アテナイではおそらく長いあいだ口誦伝承が優勢だった。そして、口演は、作品の断片的部分について行われたはずである。通し口演や編纂には、国家の指導者の介入が必要だった。また、プルタルコスやアリストテレスが伝えるリュクルゴス集成説に少なからぬ信憑性があるとすれば、ギリシア本土で断片的部分の口誦が行われる一方で、イオニアには文字化されたテキストがまとまって存在しており、それが紀元前7世紀にスパルタの為政者によって整えられた。これが口誦によってギリシア各地にも伝播したが、まさに口誦で伝わったがために、再び断片化が進行することになったと思われる。